

☎テレビホン電話(0577)(34)2313 ☎11月21日〜30日:平野真氏「本教書」 ☎12月1日〜10日:日野光洋氏「本光坊」 ☎12月11日〜20日:藤守博氏「常光寺」 宗教トラブル相談窓口(0577)13210763

11月1日・2日・3日 ひだご坊報恩講厳修



発行 真宗大谷派 高山教務所
発行者 大町慶華
〒506-0857 高山市鉄砲町6番地
☎(0577)32-0776
*毎月20日発行 50,000部
三市一郡無料配布
印刷 山都印刷株式会社



十一月一日から三日までの三日間、高山別院にて報恩講を厳修いたしました。遠近各地より大勢の方々のご参詣をいただき、厚く御礼申し上げます。
また、報恩講の準備においては教区内各組の皆さまにご協力いただきました。盛況裏に勤めることができました。また、各寺院のご住職をはじめ坊主・僧侶・門徒会・婦人会の皆さまのご尽力の賜物と深く感謝申し上げます。

親鸞聖人は『教行信証』の冒頭の総序の文に「ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなり」と述べられておられます。報恩講を終えて感じるのですが、「あなたの人生を歩んでいく道は決まりましたか」と、如来さまから大きな付帯工事につきましても検討していただくとあります。さらに法要をどのようにお勤めするのか、工事並びに法要にかかる経費をどうするのかも検討がなされており、これらが決定次第皆様にお伝えいたしますので、何卒ご理解・ご協力いただきますようお願い申し上げます。
最後になりましたが、ご参詣の皆様をはじめ多くの方々からご懇志をいただき、衷心より御礼申し上げます。関係各位に對しまして、重ねて深甚の謝意を表し、御礼の挨拶とさせていただきます。



の御修復については、屋根の葺き替えとともに耐震補強をおこなうことが院議会で了承され、屋根の御修復以外



仏弟子の誕生(帰敬式の様子)

な問いかけがあるように思えてなりません。明年の報恩講に向けて問いを背負いながら、歩んでいきたいと思えます。
現在、高山教区と高山別院が一体となり、宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要の厳修に向けて協議を重ねているところであります。別院本堂

高山別院子ども報恩講 境内に響く子どもたちの声

11月8日(土)、高山別院にて「子ども報恩講」が開催されました。親子あわせて約40名の方々が参加されました。

今年紙芝居『光りの人 中村久子さん』を上演しました。幼い頃の病気で両手両足をなくしながらもその事実を引き受け、力強く生きられた中村久子さん。講師の三島見らん氏(西念寺)は、手足がないことを通してたくさんの出遇いが生まれ、ない手足はかけがえない宝物へと変わっていったという久子さんの生き方に触れ、いろいろなものに支えられていることに気づきながら人生を過ごしていったほしい、とお話されました。子どもたちからは、紙芝居の内容やお話がむずかしいという声もありましたが、皆真剣にお話に耳を傾けていました。はっきりとはわからなくても、大切なことは子どもたちの心に届いていると感じました。お話の後は、別院内の寺宝館で中村久子展を見学しました。



お昼は定番のうどん

昼からの遊びの広場では、三輪車競走、射的、ボール投げゲーム、お絵かき、綿菓子を楽しみ、境内にはにぎやかな声が響いていました。

浄土の荘嚴 〽雅楽〽

世界最古のオーケストラといわれ、千年以上の歴史を持つ雅楽。高山別院では、八日町雅楽宮尚会、玄興寺雅楽会のメンバーがお集まりくださり、報恩講のお勤めに華を添えてくださっています。雅楽を演奏する方々は、楽人や、伶人とも呼ばれます。

雅楽を始められたきっかけは、「父が雅楽をやっていたから」等様々ですが、中には「雅楽がきっかけでお寺に足が向くようになった」という方もおられます。雅楽は、指揮者がいないため、演奏者同士の呼吸を確かめながら作りあげるのが難しいところですが、特に附楽といわれる、声の方のお勤めの声に合わせての演奏が、何よりも難しく、一番気を遣うところだそうです。それでも、「楽人と声明方がお互いの音色を聞き合い、呼吸を合わせていくことが、一番やりがいのあるところやな」とおっしゃってくださいました。



親鸞聖人のご和讃に、「宮商和して自然なり」というお言葉があります。宮、商とは、中国音楽で使われる音階です。本来、不協和音とされる「宮」と「商」が調和し、ほかの異なる音までもが溶け合って響く世界が浄土なのでしょう。僧侶、ご門徒さん、大勢のお勤めの声と共鳴する雅楽の音色。そこには、「宮商和する」浄土の世界、共に出遇い響き合う世界が示されているのではないのでしょうか。



本堂でのコンサート

『沖繩の響』開催

10月31日、高山別院本堂において報恩講の夕べ『沖繩の響』非戦・平和の願いが開催されました。

第一部では多くの住民を巻き込んだ沖繩地上戦の記録映画『軍隊がいた島』を鑑賞し、本来住民を守るべき存在である軍隊の命令によって、愛しあう家族同士が殺しあったという集団自決(強制集団死)の悲惨な事実を知らされました。

第二部、沖繩八重山民謡の第一人者、大工哲弘さんのコンサートでは、沖繩の悲しい歴史や、やるせない現実を語りつつも明るく奏でられた旋律で、約400人で満堂となった堂内には沖繩の風が吹いていました。

来年、戦後70年を迎えます。沖繩の真実をわがこととして受けとめ、引き続き一緒に「非戦・平和」について考えていきましょう。

家庭で読もう

私を照らす
ひかりの言葉⑤

酒井 義一

地獄の食事と極楽の食事

人は、いのちを終えると、エンマさまの前に行くと言われています。そして、しばらくの間、待合室のような場所で待たされるのです。やがてお腹が空いてきます。その頃を見計らってエンマさまは次の部屋へと通します。そこにはたくさんのご馳走があります。

「好きなだけ召し上がれ。ただし、そのお箸を使うように。空腹を満たしたものは極楽浄土。飢えたままなら地獄落ちだ。」

ご馳走の前には一メートルもある長いお箸がありました。この長いお箸を使って、いったいどうやって食べればよいのか。人々に動揺が広がります。するとエンマさまはこう言います。

「では、今から地獄の食事風景と極楽の食事風景をお見せしよう。」

最初に見たのは地獄でした。人々は先を争うかのように長いお箸で料理をはさむのですが、誰一人として口にできる者はいません。そこには、みにくい争いの世界がありました。

次は極楽です。人々は同じように長いお箸を使っているのですが、自分で食べるのではなく、目の前の人に食べ物を運びあっているのです。そこには、豊かで和やかな世界がありました。

人々は安堵します。「ああ、あのようによければよいのか」と。これで誰もが極楽に生まれることができると思いました。

しかし、実際に食事が始まると人々は次々と地獄へ落ちていったというのです。いったいなぜでしょう。極楽へ生まれる方法は、誰もが知っているはずなのに…。

なぜ地獄へ落ちたのか
地獄へ落ちる人々には、二種類ほどのパターンがありました。

一つ目は「ただひたすら待っている」という人です。自分から進んで行動を起こさず、他者から食べ物を与えられることを、ただひたすら待っているのです。

二つ目は「とにかく与え続ける」という人です。自分が食べ物をほしむので、相手の好みや都合も聞かずに、とにかく食べ物を与え続けるのです。

そのやり方があまりにも自己中心的なので、人々はやがてその人の前を離れていきます。

三つ目は「条件をつける」という人です。今からこれをお前に食べさせる、その代わりお前は俺にこれを食べさせる、といった調子です。

その態度があまりにも高圧的なので、人々はやがてその人の前を離れていきます。

こうしてそれらの人々は、誰からも食べ物を与えられず、飢えたまま、人々を恨みながら、地獄へと落ちていくのです。

極楽へ生まれる方法は、皆誰もが知っているはずなのに…。

自らを傷み悲しむ心
ところが不思議なことが起こりはじめます。

いったん地獄へ落ちた人の中から、新しく極楽へ生まれる人が現れたのです。

それは、飢えと恨みをもって地獄へと落ちていった人々が、実は地獄へ落ちる原因はこの自分にあったのだ、ということに気がついたという点です。

人は、悪を外に見てしまうのです。あいつが悪いと人々を恨んでいた者が、実は自己中心的な心や高圧的な心こそが、地獄へ落ちる原因であったと気がついたのです。

そして、そのような自らを傷み悲しむ心がめばえていったのでした。

あなたへのメッセージ
極楽の食事風景をちよつとのぞいてみましょう。

そこでは、他者から食べ物を食べてもらうこと、他者から食べ物をもらうことを喜ぶ雰囲気

が満ちていました。他者との出会いを大切にすることが、そこには開かれていたのです。

さて私は今、極楽へ生まれるような生き方をしているでしょうか。地獄へ落ちてしまうような生き方になつてはいないでしょうか。

教えの世界から、静かに私の生き方が照らし出されています。

※これは、前半は従来からあったお話後半は筆者が創作したお話です。

次回は藤場芳子さんの「女と男のナムアミダブツ⑤」です。

定例法座・法話(午後1時から) ○11月21日(金) 前田雅敬氏「長林寺」

○11月27日(木) 三本島之氏「蓮徳寺」

○11月28日(金) 廣田令寿氏「惠林寺」

○12月1日(月) 竹田和貴氏「慈雲寺」

○12月11日(木) 岩佐幾代氏「浄永寺」

○12月13日(土) 廣瀬堤氏「頓乗寺」

子ども作品展

10月25日から11月8日まで、飛騨地域の小中学生から出展された書道作品302点が別院本堂内に展示され、表彰式が11月8日の子ども報恩講中に行われました。



生きる力を 中村久子展

御坊報恩講

輪番賞

佳作賞

大如来

藤井美月

- 【金賞】 村井祐香・葡萄原有為・藤守周・形部航希・原田みこと・井口絵里香・清水真帆・桂川真梨子・宮田美雨
- 【銀賞】 山下伊吹・松森瑞帆・大坪建心・今井瞳希・江間翔大・大江慶真・滝和弥・池田楓菜・下田芽依
- 【銅賞】 岡田涼佑・下野桃子・長瀬綾花・高橋凜乃・田中愛純・林穂乃花・岡田真依・河田愛果・木戸口純奈

- 【佳作賞】 松田しいな・藤田柚季・榎森和夏・窪田蓮・田口亜美・藤本佑梨・坂上由依・高島暖人・望月結生・桑ヶ谷美月・船坂苺奈・田中咲有・荒城瑠那・坪野桃果・松場文香・日下部朱莉・土井日菜子・村岡凜・松下加奈・林朱莉・松山奈央・岩田陣・桂川千空・佐藤心晴・清水遥仁・今井阜資・伊藤涼七・田中友麻・池田萌花・竹内太一・野中健汰・小林幹・黒木太望人・南翔太郎・下垣内里奈・石際真歩・小亀萌・浅野華月・坂本龍乃佑・栃木梨七・古本菜々美・山本繁・谷本果南・清水滯・下方優果

東本願寺の報恩講

本山の報恩講にお参りしましょう。

11月21日(金)~28日(金)



野菜提供のお願い

飛騨御坊ボランティア委員会では、福島県二本松市の青空市場に飛騨の野菜を届けに行きます。ご協力くださる方は、12月7日までに高山別院(担当:杉野)までお持ちください。TEL 0577-32-0688



第33回 別院真宗公開講座 [第2回] 日時 12月19日(金) 午後7時~9時 講師 石川 正生氏 (富山教区玉永寺前住職) 講題 「人・使命あり」

高山別院 報恩講奉仕御礼 報恩講にはたくさんの方にご協力いただきました。あらためて厚く御礼申し上げます。

大谷婦人会 高山支部・高山教区坊守会・別院華方・石浦華東会・八日町雅楽宮尚会・玄興寺雅楽会・仏教讃歌をうたう会・高山教区教化委員会・高山教区真宗同朋の会・高山二組真宗の会・高山二組同朋会代表者会・高山一組門徒会・高山二組門徒会・吉城組門徒会・益田組門徒会・玉翠会飛騨支部・二木社中・おあさじの会・飛騨御坊ボランティア委員会・飛騨仏教青年会・門徒のみなさま (順不同)